

〈書評〉

『AI×クリエイティビティ—情報と生命とテクノロジーと。』

河島茂生, 久保田裕著, 高陵社書店, 2019年11月, 128p.

ISBN 978-4-7711-1038-0 本体 1,000円+税

本書は、デジタル社会の動向をふまえて情報の本質と人間のありようをクリエイティビティ(創造性)の観点からとらえ直した新しいスタイルの啓蒙書である。各ページの冒頭にはキーフレーズが大きな字体で示され、短文形式でAI倫理の論点が簡潔に示される。文頭には一字下げがなく、メールか長文のTwitterを読んでいる感覚である。そして、図版が多い。ページのおよそ半分が図版で占められている。

著者は、若い頃に抱いた「茫漠たる不安」ないし「自分がここにいる意味はあるのか」といった生きにくさの悩みを、接している学生たちの中にも見出しているようである。彼らに、理論的な観点からオンリーワンの自己存在への肯定感の土台を与えることが本書の動機だと考えられ、その点で上記のように現代の学生のデジタルライフを意識したソフトなつくりを採用したのだろう。

ただし扱っているテーマはハードである。論点は多岐にわたり、情報テクノロジーと生命、そして創造性の本質が問われていく。

本書は3部構成全11章からなる。第1部「AIの時代」の第1章「テクノロジーのちから」では、前の日にスマホで見たSNSの投稿をどれだけ思い出せるか、という問いから始まり、コンピュータによって断片化された膨大なデータが次々に生じては消費され消えていく様がビジュアルに描かれる。もはや、人間は、コンピュータ・システムに

取り込まれた機械の部品の如くになりつつあるのか。コンピュータは人間を凌駕するのか。こうした問いに直面させる。第2章「機械的生命・機械的頭脳への欲望」では、この問いに一見やや遠回りな戦略として、完全言語で世界を記述しようとした人々の失敗の歴史を振り返る。続く第3章「人間と機械は同じなのか」では、ホメオスタシス、論理的推論、ニューロンの働き、自己複製、学習といった人間の機能は、機械にも可能であるとされ、「それではいったい、なんの違いがあるというのか」と畳みかける。ここで「オートポイエーシス」というキーワードが、比較対象表の一角に控えめに登場する。

第2部「生物と情報の相即不利」の第4章「生物とはなにか=オートポイエーシス」で、「この謎めいた、聞きなれない言葉」が本格的に取り上げられる。冒頭で、「生物と機械の違いはあるのだろうか? オートポイエーシスの有無が分かれ目だ」とされ、「自分で自分(auto)を作る(poiesis)」という生物(生命システム)の特徴が論じられる。オートポイエーシス的なシステムはそれとして「閉じて」いる。それによって外界との境界を形成し、「内側からの眺め」という視点を獲得する。生きていく、存在するという事は繰り返し自己自身を作り続けることだ、というオートポイエーシスの理論から、人間の持つ唯一無二(オンリーワン)という性格が裏付けられる。ただしそれは自由と

いうことではなく、むしろ自由にならないことの仕組みに気づく契機でもある。殊に他者もまたオートポイエーシス的に閉じた存在である以上、同じものを見聞きしても同じように解釈してはいない。それぞれの生物に固有の環世界があるというユクスキュルの議論を引きつつ、「生物の内部のメカニズムを推察する困難さ」が示される。続く第5章「はじめに「情報」があった」では、生物がみずからに価値をもたらすものを「図」として「地」から区別する作用が情報の原義であり、「in (内側に) form (かたち) を作り出すのが情報」であるとされ、元来、情報とは生命と不可分のものであることが示される。しかしこの情報の本来の意味がコンピュータの登場で大きく変わっていく。「情報とはコンピュータが処理するもの」という考えが生じ、「機械的に処理するため、意味を捨て」たシャノンの情報理論と共にこの観念が広まった。しかし、シャノン流の意味なき情報だけが情報だと考えるのは、「とんだ勘違い」だと著者は言う。機械情報と生命情報との区別がつかないために誤解及び混同が生じており、情報社会の本質も見失われている。「情報過多」「情報洪水」は否定的な意味合いだが、本来情報とは生命にとって有益なものはずだ。

このような情報概念の整理を行った後、いよいよ創造性の議論に入るのだが、その前に漫画家の松本零士氏へのインタビュー「創作は体験に根ざす」が収録されている。同氏は「体験しないと奥行きが出てこない、ウソっぽく感じられますね」「体験が豊富であれば、それが物語の豊富さにつながる」と語る。「体験」は生命情報となり、創造性の源ともなる。

第3部「AI時代の創作」の第6章「創るために、生命情報に耳を傾ける」では、創作行為にあたって、「体内で渦巻く大量の生命情報を意識に上げ」、言葉や絵やストーリー、セリフといった「社会情報」にしていく際の身体性の役割に注目する。「膨大な生命情報のうち、ほんのわずかだけが意識に上る」「だからこそ身体で考える、身体に刻み込ませる」。身体とは生命の具体的なかたちである。ここから絞り出すように社会情報が紡がれる。この身体性は一個体のみのもではなくて、歴史を背負ったものでもある。第7章「創作のため、先人の知恵を借りればよい」では、知の連鎖を象徴する存在として図書館への言及がある。第8章「唯一無二だからこそ、唯一無二の表現ができる」では、人間が一人ひとり異なるオートポイエティック・システムであることを想起させ、人が生きることに伴う表現行為について、「受賞するかどうかよりも、価値を生み出せたかどうか」と訴える。第9章「創作とテクノロジー」では、「創作にはテクノロジーが不可欠」としながらも、「いかにテクノロジーを出し抜くか」「テクノロジーをいかに最大限利用して自分の制作を行うか」が課題とされる。第10章「創作の倫理」では、人が互いに唯一無二であることを認めることから知的財産の権利尊重が裏付けられる。第11章「創作の有機的な連関を支える」では、その権利を尊重しつつ、知的財産を共有し活用する具体的方策について述べられる。

各章の論点は、本書の簡潔な記述のみで尽きず、さらに展開されるべきものである。創造性に資する情報学理論、またAI倫理の入門書として知的刺激に富んだ著作である。

(評者：竹之内 禎)